

第5章 京都府美月遺跡の発掘調査

清水 芳裕

美月遺跡は京都府船井郡丹波町蒲生野の京都大学農学部附属牧場内にある。須知川と高屋川が由良川として北流するその合流点から南方約1 kmに位置しており、須知川左岸に形成された蒲生野丘陵の小規模な扇状地の末端部にあたる。遺跡の周辺は、西に大阪層群からなる美月山と南の蒲生野丘陵をひかえ、東は須知川によって形成された低い河岸段丘、北は高屋川の氾濫原が開けている(図22)。この一帯には、古くから遺跡の存在が知られており、大正2年に須知競馬場建設の折に古墳時代の土器が出土したと伝えられている。また昭和19年には小林行雄氏が、競馬場跡で土師器と須恵器を採集している。戦後の開拓時にも、蒲生野丘陵上で6世紀ごろの古墳が7基発見されており、高屋川に沿う富田地区には現在も3基の古墳が残っている。また、文献史料の上からは、古代末から中世を通じてこの地域が山内荘の荘域にもあたっている〔細見80 pp. 157-158〕。

このような周辺の遺跡が分布していることを考慮して、昭和53年度以降立合調査をおこなってきた。その結果、昭和55年度の中小家畜舎等の新営にともなって実施した立合調査で、予定地のほぼ全域に遺物の包含層が存在していることを確認し、同時に11世紀～12世紀の瓦器碗(図28 IV 25)を採集した〔京大埋文研 81b p. 2〕。そこで工事を中断し、昭和55年11月25日から12月27日にかけて1468 m²の発掘調査をおこなった。これによって、弥生中期と平安後期の溝や土坑などの遺構群の存在を明らかにし、丹波地方の弥生土器あるいは瓦器の地域性を考察するための多くの貴重な資料を得た。



図22 調査地点と周辺の地形 縮尺1/50,000

1 層 位

調査地の現地表面は標高約152mで、南東から北西にむかって緩やかに下がる。堆積する層位は調査区全域にわたって基本的に上から、表土(第1層)、淡茶褐色土(第2層)、黒褐色土(第4層)、黄色粘質土(第7層)、礫混り黄色粘質土(第8層)があり、その他部分的に暗茶褐色土(第3層)、黒褐色粘質土(第5層)と黄色粘質土混り黒褐色土(第6層)がみられる(図23)。このうち遺物包含層は第2層から第6層までで、第7層以下は、基盤および二次堆積物からなる。層位の堆積状況は全体に一律でなく、B5・B6区付近から南東へむかって黄色粘質土上面が次第に高くなり、このため黒褐色土は北西部に厚く、南東部に薄く堆積する。大部分の遺構は、この黒褐色土の上面とその細分によって検出され、8~11区では黄色粘質土上面で検出されるものが多い。主要な遺物包含層である黒褐色土は植物腐食物が含まれる黒ボクで、その性格について詳しい調査はおこなっていないが、蒲生野丘陵一带に繁茂したイネ科草本類に関係をもつ腐蝕集積土壌で、弥生時代以前に生成され、これらの二次的な堆積にともなって遺跡の包含層が形成されたものと考えられる。

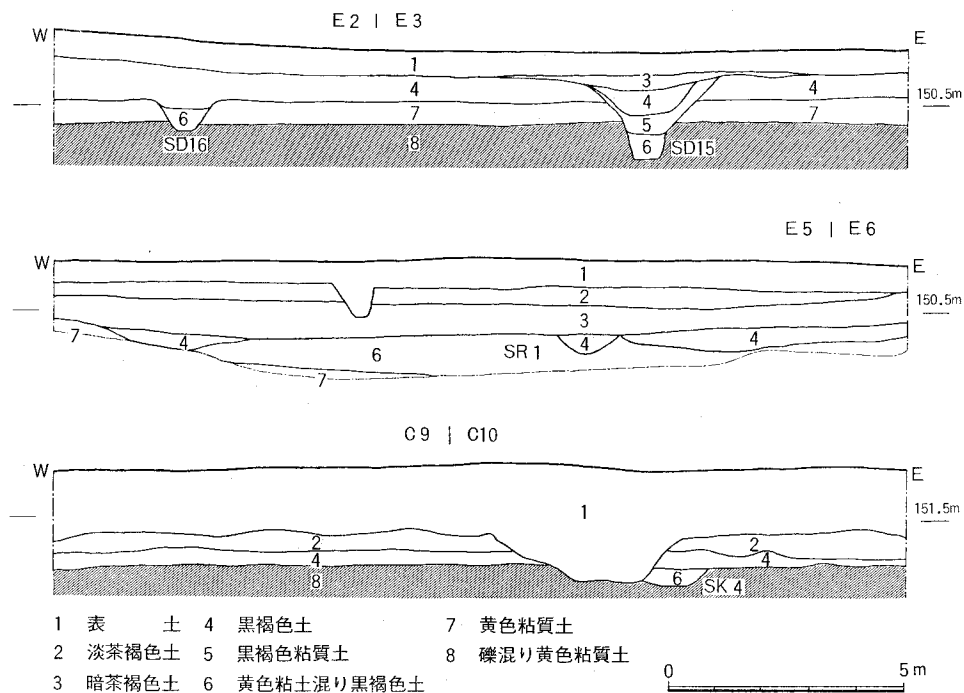


図23 調査区北壁の層位 E2・E3区(上), E5・E6区(中), C9・C10(下) 縮尺1/160

2 遺 構

現代・近代と平安時代，弥生時代の遺構群があり，以下各時期別に記述していく。

現代・近代の遺構(図24)

表土下の淡茶褐色土上面で検出される遺構としては，直線的に並ぶ柱穴群がある。直径15～30cmで，内に柱根を残すものが多い。B1～B4，C1～C4区に集中してみられ，東西方向と南北方向のそれぞれ4列が建物SB1に復原できた。柱穴からは，現代の陶磁器が出土すること，現代の建物群と同一方向に並ぶことから旧海軍の兵舎跡と考えている。このほかに同様の状況をもつ遺構として，D3・D4区でSB2が，C7～C10区で建物跡の一部とみられる柱穴列SB3が検出された。また黒褐色土上面では，上記の遺構群とは方向を異にして，方位を東と西に振る柵列SA1・SA2と溝SD1～SD14を検出した。このうちSA2とSD1・SD3，SA1とSD2・SD4は，それぞれほぼ平行する配置を示している。特にSA1・SA2とSD1・SD2とは，

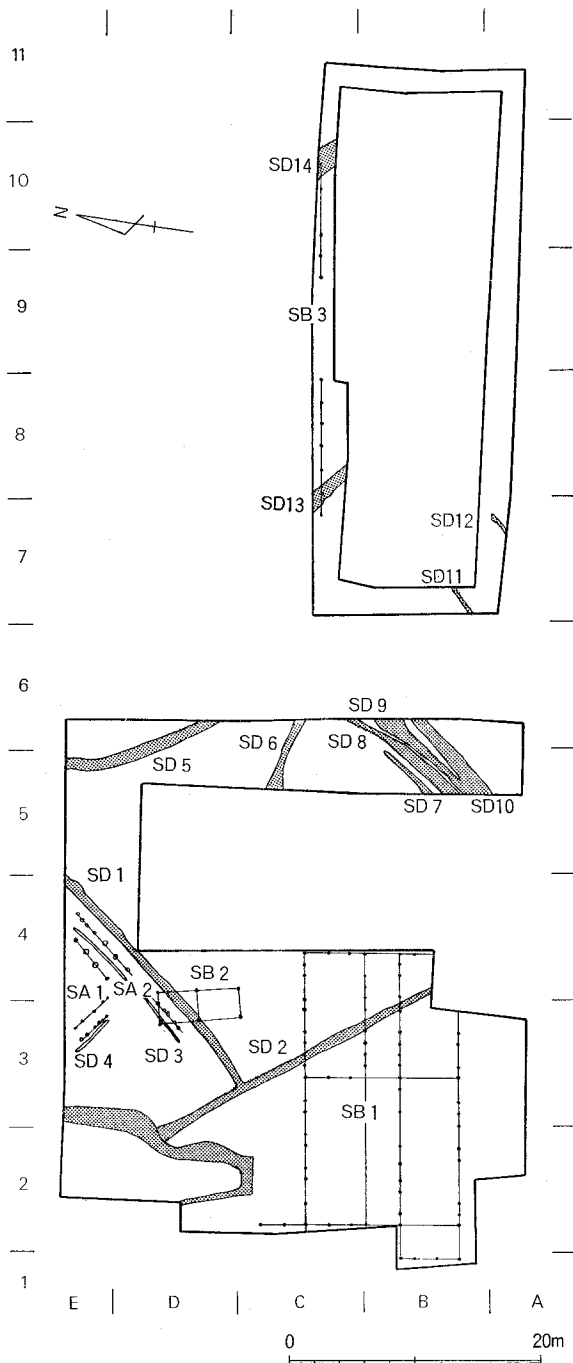


図24 現代・近代の遺構 縮尺1/600

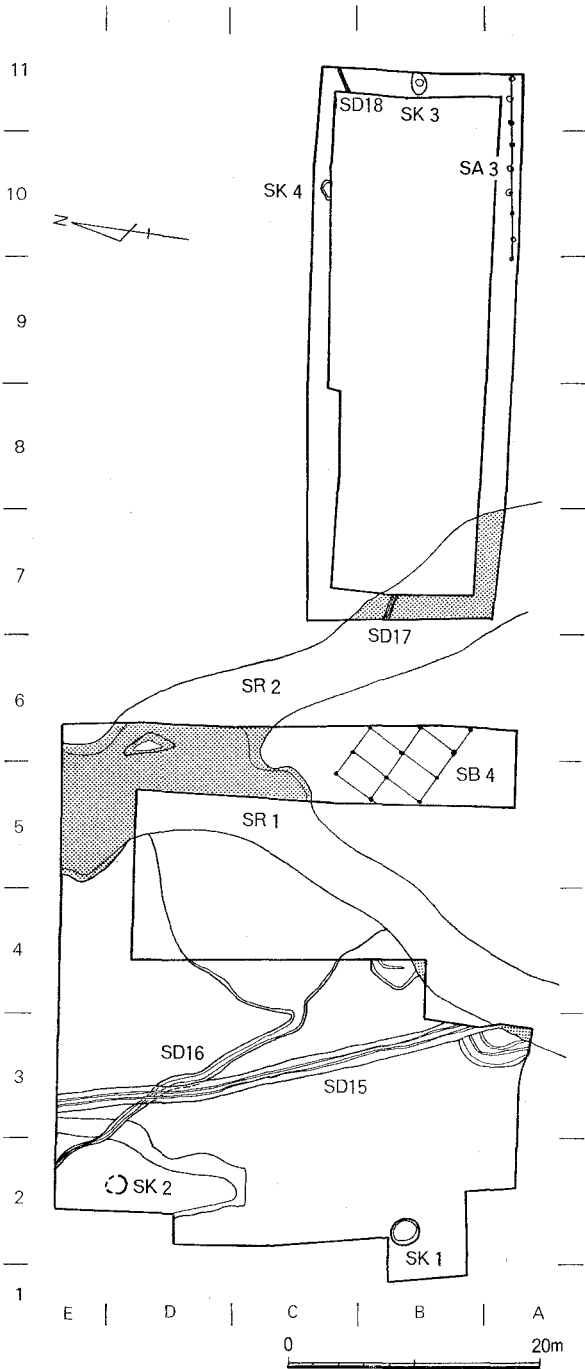


図25 平安・弥生時代の遺構 縮尺1/600

柵列とそれらをかこむ溝という一連の遺構群と考えることができる。これらは明治初期の地籍図にみえる地割に近い方向をっており、当時の蒲生野開拓にともなうものであろう。

平安・弥生時代の遺構(図版12・13, 図25) 平安後期の遺構として、柵列SA 3, 建物SB 4, 土坑SK 1・SK 2, 川SR 1上層・SR 2上層が、黒褐色土上面および黄色粘質土上面で検出された。SA 3は調査範囲が狭いため、これに関連する柱列を発見することはできなかったが、建物跡の可能性もある。SB 4は柱間が2.1m×3.4mをもつ建物で、その柱穴埋土からは底部糸切りの土師器皿・甕, 黒色土器椀・皿, 玉縁口縁をもつ白磁碗などが出土した(図28)。これにより12世紀ごろの建物跡と考えられるが、遺物に白磁をともなっているものの、規模はSR 1・SR 2によって規制され、関連する遺構も不明であるため、その性格については明らかでない。SK 1・SK 2からは、土師器皿と瓦器の椀・皿が出土した。SR 1・

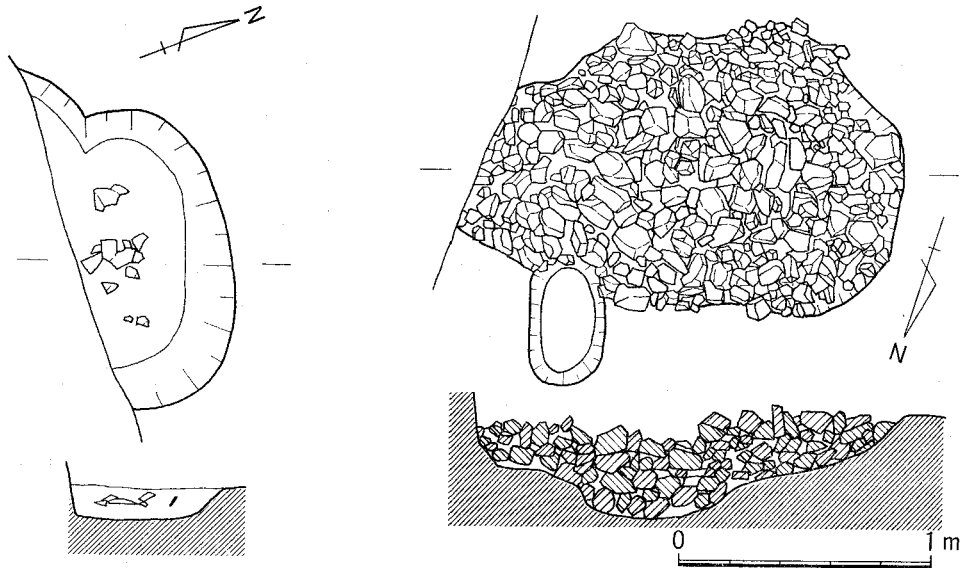


図26 土坑SK4(左), 土坑SK3(右) 縮尺1/30

SR2はC5・C6区から南で東西に分かれ、一方はA3・A4区の、他方はB7区の黒褐色土に連なる川と考えることができ、その上層では土師器皿、輪高台をもつ白磁碗、須恵器鉢などが出土し、若干の弥生土器が混在する。

弥生時代の遺構としては、溝SD15～SD18、土坑SK4、川SR1下層・SR2下層がある。SD15は断面V字形で、さらに溝底を方形に掘込むもので、同様の形態をもつ溝は、京都府船井郡園部町曾我谷遺跡〔園部町教委77 pp. 8～12〕、中郡峰山町途中ヶ丘遺跡〔峰山町教委77 pp. 41～76〕などに類例がある。これはB4区でSR1下層と連なっており、溝底は南から北へ向かって下がるもので、SR1から取水した水路と考えている。またSD16はD3区でSD15に切られて交差する溝で、これもSR1からの水路と考えられる。SD17・SD18は、ともに断面U字形をなす小規模な溝で、弥生中期の土器がまぎれまぎれ出土する(図版13-3)。SK4は礫混り黄色粘質土を掘込んだ土坑で、弥生中期の壺2個体が良好な状態で出土した(図版13-2, 図26左)。

弥生・平安時代の遺構は、南東から北西へ下がる地形を反映して、建物、土坑などがおもに南東部にあり、川SR1・SR2によって南西部と区画されている様子がみられる。とくに弥生時代には、これらの川が生活と生業の場を境していたことを知ることができる。このほかに遺物がなく、時期や性格について明らかではないが、大量の礫を充填した土坑SK3もみられる(図版12-3, 図26右)。

3 遺物

弥生時代の土器、石器と古墳時代の土師器(図版14・15, 図27), 平安後期～鎌倉時代の土師器, 黒色土器, 瓦器, 須恵器, 中国製陶磁器(図版14・15, 図29)などが出土した。

弥生土器には壺(Ⅳ1～Ⅳ5), 甕(Ⅳ6・Ⅳ7), 高杯(Ⅳ8)があり, 石器には磨製石斧(Ⅳ10)と打製石斧(Ⅳ11・Ⅳ12)がある。そのうち第Ⅳ様式を中心とする土器が溝, 土坑, 川などからまとまって出土した。Ⅳ1はSK4, Ⅳ2・Ⅳ3・Ⅳ6はSD17, Ⅳ5・Ⅳ8はSR1上層, Ⅳ4・Ⅳ9は淡茶褐色土, Ⅳ7は黒褐色土から出土したものである。Ⅳ1は口縁部が大きく外反し, 端部をやや肥厚させて外面には凹線と刻み目が, 内面には櫛描波状文と扇状文が施され, 頸部には断面三角形の貼付け凸帯文がめぐる。Ⅳ2は壺形土器の体部で, 外面を刷毛目によって調整し, 櫛描の波状文と流水文を施す。流水文は時計回りに, そののちに下段の波状文を施文している。Ⅳ4は口縁部を上下に肥厚させて, 外面には凹線文と縦の棒状浮文を4個6単位で, 内面には櫛描波状文を施す。Ⅳ5は口縁端部を下方に垂れ下がらせて外面に凹線文を施すもの, Ⅳ6は「く」字状に口縁部が屈曲し, 指押え痕が残る。Ⅳ7は比較的小型の甕形土器で, 口縁部が屈曲して上端に刻み目が, 体部には叩き目が施されている。これらは途中ヶ丘遺跡〔峰山町教委77 pp. 77-134〕, 弥栄町奈具遺跡〔弥栄町教委72 pp. 19-48〕, 綾部市青野遺跡 A 地点〔綾部市教委76 pp. 53-73〕などでまとまって出土している。調整, 文様の構成は畿内弥生土器のそれに加えて, 丹後地方の影響を考慮しなければならないが, いずれも第Ⅳ様式にあたるものである。そのほかに, 体部が球形で口縁部が直線的に開く土師器(Ⅳ9)がある。Ⅳ10は砂岩製の磨製石斧の刃部でSR1から, Ⅳ11・Ⅳ12はスレート製で, それぞれSD15と黒褐色土から出土した。Ⅳ12の打製石斧は出土例は少ないが, 弥生時代のものと思われる。

平安・鎌倉時代の遺物には, 土師器の椀・皿・甕, 黒色土器, 瓦, 白磁・青磁の椀・皿, 須恵器鉢などがある。とくにSB4の柱穴からは, 土師器, 黒色土器, 白磁の良好な一括遺物が出土した。Ⅳ13は底部糸切りの土師器皿, Ⅳ16は頸部に指押えをもつ土師器甕である。Ⅳ14は内外面に丁寧な篋磨きを施す黒色土器皿, Ⅳ15は内面のみ篋磨きを施し, 高台のつく黒色土器椀で, いずれも糸切り底をもつ。Ⅳ17は比較的小さな玉縁の白磁椀で, 灰白色を呈する。平安後期の遺物で, この種の黒色土器は加悦町中上司遺跡〔加悦町教委79 pp. 33-36〕など丹後地方で集中的に出土している。Ⅳ18～Ⅳ21は土師器皿で, Ⅳ18・Ⅳ19は口縁部に2段撫でを, Ⅳ20は1段撫でを, Ⅳ21は底部に静止糸切り痕をもつ。Ⅳ22・Ⅳ23は瓦器皿。Ⅳ24は内面見込みに交差する暗文を, 内外面には篋磨きを施す瓦器椀

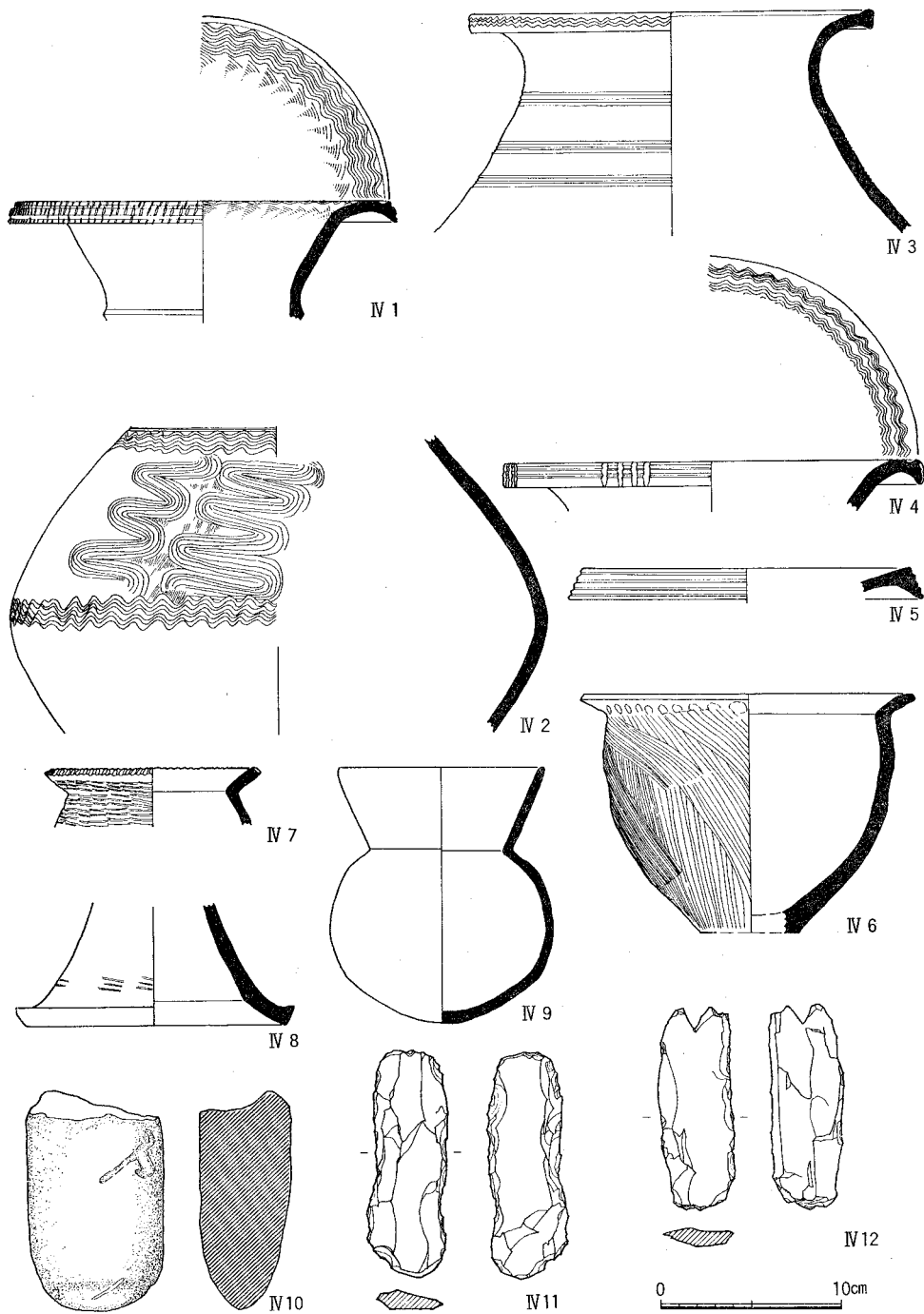


图27 SK 4 出土遺物(Ⅳ 1 弥生土器), SD17 出土遺物(Ⅳ 2 · Ⅳ 3 · Ⅳ 6 弥生土器), SR 1 上層出土遺物(Ⅳ 5 · Ⅳ 8 弥生土器, Ⅳ 10 石器), 淡茶褐色土層出土遺物(Ⅳ 4 弥生土器, Ⅳ 9 土師器), 黑褐色土層出土遺物(Ⅳ 7 弥生土器, Ⅳ 12 石器), SD15 出土遺物(Ⅳ 11 石器)

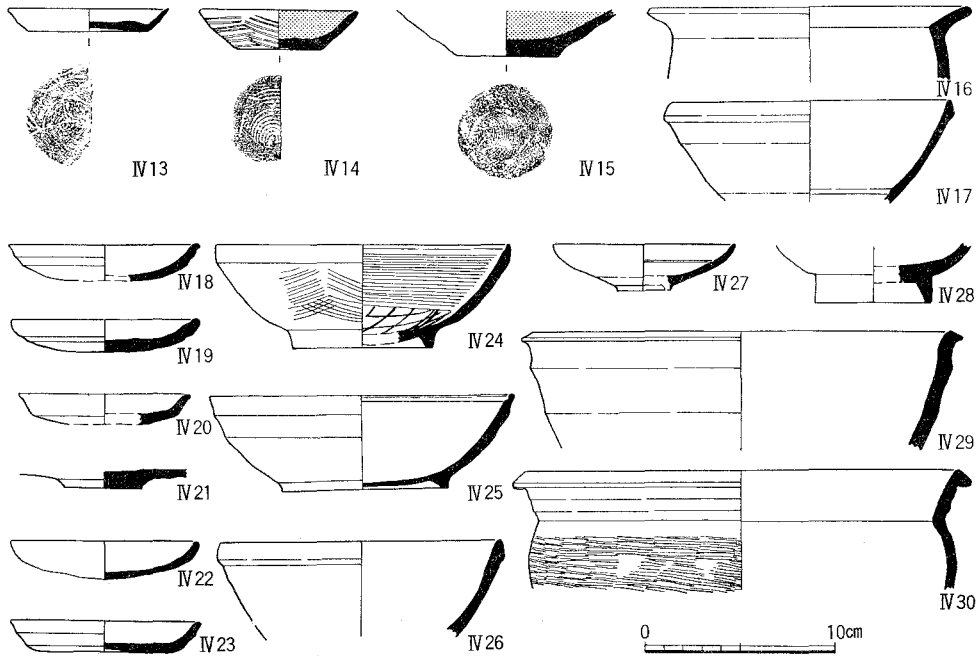


図28 S B 4 出土遺物(Ⅳ13・Ⅳ16土師器, Ⅳ14・Ⅳ15黒色土器, Ⅳ17白磁), 淡茶褐色土層出土遺物(Ⅳ18・Ⅳ21土師器, Ⅳ27白磁, Ⅳ29須恵器), 黒褐色土層出土遺物(Ⅳ19・Ⅳ20土師器, Ⅳ21～Ⅳ24瓦器, Ⅳ26白磁, Ⅳ30陶器), S K 2 出土遺物(Ⅳ25瓦器), S R 1 上層出土遺物(Ⅳ28白磁)

で、堅緻で暗灰色を呈する。Ⅳ25は口縁部を撫でによってやや外反させ、内面に沈線がめぐる瓦器碗。焼成が悪く黄灰色を呈する。S K 1 出土の碗には、この形態のものが多い。Ⅳ26は玉縁の、Ⅳ28は輪高台のつく白磁碗で、Ⅳ27は内面見込みに沈線がめぐる白磁皿である。Ⅳ29は須恵器鉢、Ⅳ30は中世陶器甕である。Ⅳ18・Ⅳ21・Ⅳ27・Ⅳ29は淡茶褐色土、Ⅳ19・Ⅳ20・Ⅳ22～Ⅳ24・Ⅳ26・Ⅳ30は黒褐色土、Ⅳ28はS R 1 上層から出土した。Ⅳ25は立合調査のさいにS K 2 から採集したものである。これらの瓦器や白磁は福知山市大内城跡〔伊野82 pp. 8-17〕からも出土しており、12世紀ごろにあたるものと考えられる。

4 小 結

今回の調査によって、弥生中期と平安後期の遺構群の存在が明らかになり、さらに弥生中期の土器に関しては、由良川上流域では唯一の弥生時代遺跡の調査であり、畿内と丹後地方の土器要素の関係を捉える上で貴重な資料を得た。また、平安後期の建物、土坑などの遺構群と弥生時代以後連続と残存した川S R 1・S R 2との立地の関係などは、今後に残された問題である。なお、遺物については佐原真氏、梅川光隆氏から、黒ボクに関しては石田志朗氏から有益な御教示をいただいた。